

## 平成30年度 全国学力・学習状況調査における

### 北九州市立 河内 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数, 理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

#### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

#### 2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 算数, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力
・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の6年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

### 3. 教科に関する調査結果の概要

#### (1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.5	71	4.3	54	8.6	61	5.0	50	9.6	60
全国	8.5	71	4.4	55	8.9	64	5.1	52	9.6	60

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・全体的には全国平均正答率を少し上回っていた。また、「読むこと」以外は全国平均正答率を上回っていた。 ・「読むこと」については、多少課題が残る。登場人物の心情や必要な情報を読み取る学習を増やしていく必要がある。
	よってきた問題	・相手や目的に応じて、事例を挙げながら筋道を立てて話す問題の正答率が高い。
	努力が必要な問題	・登場人物の心情を情景描写を基に捉える問題や敬語の使い方の問題の正答率が低い。
国語B	全体的な傾向や特徴など	・全体的には全国平均正答率を少し下回る。また、すべての観点で全国平均正答率を下回る。 ・「読むこと」「書くこと」については、課題があり、朝学習や放課後ステップアップ等での継続した取組が必要である。
	よってきた問題	・司会の役割について捉える問題の正答率が高い。
	努力が必要な問題	・目的や意図に応じて、内容の中心を明確にして書く問題や話し手の意図と自分の考えを比べる問題の正答率が低い。
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全体的には全国平均正答率をかなり上回っていた。また、すべての観点で全国平均正答率を上回っていた。 ・「数量関係」全体ではよいが、円については課題が残る。視覚的に問題をとらえることができるように図や表を適切に使用して、理解を深めていく必要がある。
	よってきた問題	・数の大きさを比べたり、1あたりの量を求める式を立てたり、円周率を求めたりする問題の正答率が高い。
	努力が必要な問題	・単位量あたりの量を求める問題は理解できているが、式の意味を吟味したり比較したる問題の正答率が低い。
算数B	全体的な傾向や特徴など	・全体的には全国平均正答率をわずかに上回り、「数と計算」「図形」の領域も全国平均をわずかに上回る。 ・「数量関係」「量と測定」の領域に課題があり、算数的活動を重視した学習を進めていく取組が必要である。
	よってきた問題	・規則性を解釈し、それに合う条件を判断する問題や数値の根拠を明確に記述する問題の正答率が高い。
	努力が必要な問題	・メモやグラフから情報を読み取り、関連付けて記述する問題の正答率が低い。
理科	全体的な傾向や特徴など	・全体的には全国平均正答率をかなり上回っていた。また、「自然事象についての知識・理解」以外の観点で全国平均正答率を上回っていた。 ・「自然事象の知識・理解」については少し課題があり、ICT機器等を活用したり、実験や観察を通して体験的に学習したりし、基礎的事項の内容の理解を深めていくことが必要である。
	よってきた問題	・複数の情報関連付けながら分析して考察する問題や知識を生かして実際の電気回路に適用する問題の正答率が高い。
	努力が必要な問題	・実験を構想したり、改善したりする問題や法則から考える問題についての問題の正答率が低い。

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己肯定感が高まり、将来の夢や目標をもって生活し、社会への寄与をしたいと展望を持っている。</li> <li>・放課後や休日の過ごし方は家庭で過ごすことが多く、家族とのふれあいはよく行っているが、友達と過ごすことが少ない。</li> <li>・宿題や家庭での学習を計画を立てて行っているが、学習時間は不十分である。</li> <li>・すべての児童が、授業で学級の友達との間で話し合う活動をよく行ったと答え、話し合うことの大切さを理解できている。しかし、話し合う活動を通して自分の考えを深めたり、広げたりできたという実感は十分ではない。</li> <li>・算数科の学習は好きと答える児童は少ないが、大切であるとすべての児童が答え、学習の意義を理解できている。</li> <li>・理科の学習では、どの設問でも肯定的回答をしている。理科について、すべての児童が好きであり、大切であると答え、学習の意義を感じながら意欲的に学習に取り組んでいる。内容についても理解できていると実感している。</li> <li>・自然の中で遊んだことや観察をしたことがあるとすべての児童が答え、本校の特色を活かした体験活動が児童に実感できている。</li> </ul>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後、話し合いをすることで自分の考えが深まったり広がりたりできるような学習の場や形態を工夫していく。また、振り返りの際に、相手の意見を聞いて分かったこと等を意図的に書かせる活動を計画的に取り入れる。</li> <li>・家庭学習充実のために、宿題や課題のたせ方等を工夫や総合的な学習の時間や行事との関連付けをし、以後の学習に備えることができるようにしていく。</li> <li>・地域や保護者と連携した2学期の様々な行事の中で、一人一人の評価を工夫し、児童の自己有用感を高めていく。</li> </ul>
--

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭読書を充実するために、学校図書館の蔵書の充実やPTA理事会での資料配布等での啓発を進め、児童が読書をする環境を整えていく。</li> <li>・外部と積極的に関わっていけるように、学校便り、保健便り等での啓発をこれからも継続して行うとともに、PTA理事会での啓発も進めていく。</li> <li>・これまで取り組んできた「携帯電話、スマートフォン夜10時オフ運動」を理事会等の場を活用し、保護者に呼びかけ、推進していく。</li> </ul>
---